

とやまスポーツ物語



「昭和33年、第13回国民体育大会開会式」（『置県百年 富山県』より）

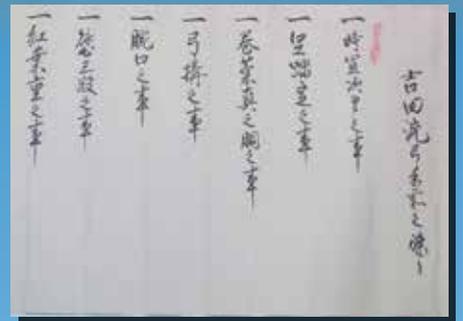


「横網梅ヶ谷」



「横網太刀山」

（ともに国立国会図書館デジタルコレクションより）



「吉田流弓伝受書」（富山県公文書館蔵）

入場無料

FREE ADMISSION

会期 令和2年9月30日(水)～11月3日(火)

会場 富山県公文書館展示室

開館時間 午前9時～午後5時

期間中は土日祝日も開館

目次

開催にあたって	1
はじめに	2
一 江戸時代の武術・武芸	2
二 近代スポーツの始まり	5
三 スポーツの大衆化と戦争	7
四 スポーツの復興	11
五 近年のスポーツ	14
おわりに	15
◇主要参考文献	15
◇関連年表	16
◇企画展史資料一覧	17

開催にあたって

私たちの生活の中でスポーツは大きな影響力を持っています。来年開催される東京オリンピック・パラリンピックなどのスポーツイベントは、国際交流や異文化理解を深めるきっかけとなっています。また、新型コロナウイルスの感染拡大によってスポーツイベントが中止や延期になることで、スポーツを楽しむ平和な日常の有難さを痛感させられています。江戸時代、武士は剣術や弓術などを必要な技術として習得し、庶民には相撲の興行が人気でした。明治時代になると、西洋のスポーツが紹介され、学校教育に取り入れられました。大正年間から昭和の初めにかけて学校を中心にスポーツは盛んになりました。しかし、戦争が激しさを増すとともに、スポーツは戦力強化の手段として普及と統制が進められました。戦後、スポーツは国民に勇気と希望を与え、昭和三十年代以降の経済成長に伴い、スポーツ施設の整備と指導者の養成が進みました。その後も、社会の変化に伴ってスポーツへのニーズが多様化する中、様々な面でスポーツの振興が図られてきました。郷土富山でも、スポーツは人々の暮らしに大きく関わってきました。

今回の企画展では、当館所蔵の史資料を中心に、江戸時代から近年に至るまでの富山におけるスポーツの出来事や活躍した人物などを紹介します。郷土の歴史の一端にふれていただくと同時に、多くの方々に公文書館所蔵史料への関心を高めていただき、一層の活用につなげる機会としていただければ幸いです。

今回の企画展を開催するにあたって、多くの方々や機関からご協力を賜りました。ここにご芳名を記して感謝の意を表します。

国立国会図書館 国立公文書館 富山県立図書館 富山県映像センター 富山市郷土博物館 富山大学附属図書館

内田忠保（立山町） 黒田沢子（富山市） 谷口正夫（高岡市） 高堂肆郎（富山市）

竹島精一（富山市） 平井建夫（富山市） 藤田達子（富山市） 森田健一郎（富山市）

佐藤靖子（東京都） 半田景康（三重県） 藤井良史（神奈川県） 古畑弘子（東京都）

（順不同敬称略）

令和二年九月

富山県公文書館

はじめに

江戸時代、剣術などの武術は、武士としての教養を高め、心身を鍛錬するために取り組まれるようになった。庶民には相撲の興行が人気を集めた。明治時代になると、これらの武術や相撲などが文明開化の中で変容していく一方、西洋からは様々なスポーツが紹介され、西洋化を進める国の政策もあり、学校や軍での教育などに取り入れられていった。大正から昭和初期には学校を中心にスポーツが盛んになり、その観戦も人気を集めた。

しかし、日本をとりまく国際関係の悪化により戦争の時代へと突き進む中、スポーツは戦力強化の手段として統制が進み、最後は実施自体が難しくなっていた。終戦後もスポーツ界の苦難は続くが、復興が進む中、昭和三十一年以降の経済成長に伴い、スポーツ施設の整備と指導者の養成が進んだ。昭和三十三年（一九五八）の第十三回国民体育大会は、本県におけるスポーツ復興の総決算と考えることができる。

その後も、社会の変化に伴ってスポーツへのニーズが多様化する中、様々な面でスポーツの振興が図られ、平成六年（一九九四）には全国高等学校総合体育大会、平成十二年（二〇〇〇）には第五十五回国民体育大会が開催された。今回の展示では、江戸時代から近年に至るまでのスポーツにまつわる出来事や活躍した人物などを五部構成で紹介する。

一 江戸時代の武術・武芸

武士と武術・武芸

十七世紀初頭、江戸幕府が成立し、島原・天草一揆（一六三七）以降、本格的な内戦は幕末まで起こらず、武術は武士が本業とすべき技芸として修練されることになる。弓術や馬術は上級武士の嗜みという側面が強かったが、刀はすべての武士が身に着ける身分の象徴でもあったため、剣術を中心に流

派武術が展開した。これらの流派武術では「形」の稽古が基本で、他流試合は禁止された。それぞれの流派に教習法があり、習得した者には免許が与えられた。剣術では十八世紀初期から竹刀と防具が工夫され、竹刀で打ち合う形が急速に広まった。

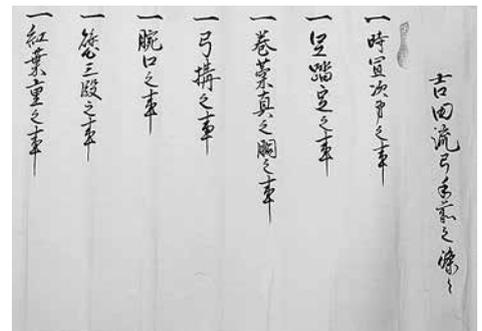
各藩では流派の中から藩の「御流儀」として指定し、指南役を置くなどした。

富山藩では、初代藩主前田利次（一六三九～七四年在位）の時に、吉田流弓術の吉田茂貞、安見流砲術の日比野小兵衛、原田流槍術の中野重成、富田流剣術の小澤氏春、馬術は大坪流から起こった大坪新流の舟田某がそれぞれ指南役となった。二代藩主前田正甫（一六七四～一七〇六年在位）は、中条流剣術の喜多村主計助、山口宗久、稲富流砲術の渡辺佐次右衛門、原田流槍術の松阪加右衛門、山口流剣術の小柴貞義（小柴山口流の祖）、四心多久間見日流柔術の渡辺繁正を師範とし、この渡辺には道場を与え、藩士に柔術を奨励した。また、桜木流居合、小天狗流棒術を採用した。三代藩主前田利興（二七〇六～二四年在位）は、大坪流馬術を極めた江戸浪人佐々木百助を御馬乗役として召し抱えた。



大坪流十一か条相伝目録
(浅野家文書 富山県公文書館蔵)

享保・寛政・天保の三大改革が実施され、十八世紀末から異国船が度々日本に接近する事態が発生し、武術の振興が図られた。富山藩では、大仙流砲術の祖である瀬川甚内が享保年間（一七一六～三六）に来富し、河上秀直らが門下に入り、河上家は砲術を



吉田流弓伝受書
(藤田家文書 富山県公文書館蔵)

以て家業とした。駒川改新流柔術は小島直吉が宝暦年間（一七五一～六四）に来富して教え、門弟も多かった。

五代藩主前田利幸（一七四五～六二年在位）は、江戸で道場を開いていた宝蔵院流槍術の達人、浪人篠田信時を宝暦六年（一七五六）に召し出して、藩の槍術指南役に任じた。以降、篠田家は藩士への槍術指導を担った。寛政六年（一七九四）、藩は、徒士身分の藩士たちに剣術、柔術、水練、算術を修練すべき旨を達した。同八年、藩は、現在の富山市有沢の神通川原で藩士の子弟に涵泳流の水練を行った。この時の師範は佐々木百助の孫の佐々木百輔で、江戸在府中に涵泳流の祖、津山藩士名村成敏の下で学んだという。

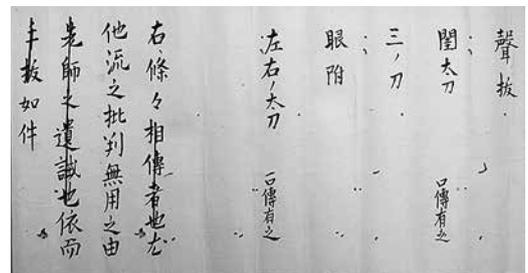
十八世紀末からは各藩で藩校が作られ、儒教の教育とともに各種の武術が奨励された。富山藩では、安永二年（一七七三）、六代藩主前田利興（一七六二～七七年在位）が藩校広徳館を開設し、広徳館では弓術・居合・剣術・柔術・砲術・槍術が習練され、目録修得以上の実力をつけることが課せられた。また、馬術や水練も教練された。このうち



武芸格別出精につき奉書
(半田家文書 富山県公文書館蔵)

居合は、長屋吉富（飛騨国の金森家の浪人）が正徳年間（一七一一～一七二六）に富山藩に伝えた民弥流であり、民弥流では富山藩に伝わったもののみ現在にまで伝承されている。

文政元年（一八一八）、富山で蹴鞠が流行し、九代藩主前田利幹（一八〇一～三五年在位）をはじめ、重臣・近習など



民弥流目録
(浅野家文書 富山県公文書館蔵)

が競って練習に励んだ。利幹は同二年には足軽に対して柔術・棒術などの稽古に励むよう訓示し、免許を伝授されたものは奉行に届けさせ褒美を与え、稽古に励んだ者たちには奉書を下すなど、武術を奨励した。利幹は武術に熱心に取り組み、出自の大聖寺藩（富山藩へは養子で入った）の酒井定賢（酒井流砲術）から砲術を学び、藩士の今村重邦を酒井の門下に入れ、今村が皆伝を受けると今村を師範役とした。

十代藩主前田利保（一八三五～四六年在位）は、藩主になる以前の文政七年に藩士の吉田有恒に起倒流柔術を学ばせ、吉田は天保三年（一八三二）には起倒流柔術を指南するようになった。また、吉田は、同二年に利保の命を受け、天真白井流の開祖として知られていた剣豪白井亨に入門し、同十二年には同流の皆伝を許され、師範となつて藩士を指導した。他にも利保は駒川改新流と天神真楊流の柔術を採用し、浅野五兵衛を山口流剣術師範に任じ、岡島秀綱を藩校広徳館の山口流剣術師範に任じた。神通川下流に水練場を設け、立石重高らを指南役として藩士の子弟及び十歳以上の町人に対して水練を奨励するなど、武術の振興を図つた。

幕末頃、十二代藩主前田利聲（一八五四～五九年在位）の時には武装泳ぎの練習も行った。また、高島流砲術を修めた渡辺尚義が砲術師範となり、最後の藩主十三代前田利同（一八五九～七一年在位）の時には高島流が大いに行われた。このように、各藩主それぞれの時代における社会情勢や評判の武術流派を踏まえて、藩は流派を採用している。



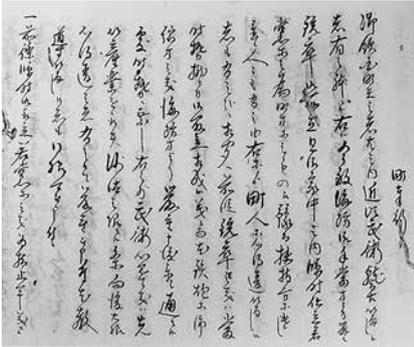
御鷹野御屋献立
(高堂家文書 富山県公文書館蔵)

藩主の野外活動として鷹狩があげられていた。鷹狩はスポーツとしても非常に優れていた。鷹狩を行うには、その場所まで移動する必要があるため、現在のように交通機関が発達していないため移動に労力を使う。また、獲物を探して猟場を駆け巡るため、足

腰が鍛えられる。鷹狩は五代將軍徳川綱吉が禁止したが、八代將軍徳川吉宗によって復活し、吉宗が整備した鷹狩の職制は各藩に導入されていた。富山藩では九代藩主前田利幹が無類の鷹狩好きであったといわれている。一方で、鷹狩は農民にとつてはかなりの負担だった。藩主の鷹狩に備えて鷹場(猟場)周辺の村々には鷹場の保全のため様々な規制や諸役が課された。藩主が鷹狩に来た際には休息や食事などの対応をしなければならなかった。鷹の供給地である御鷹山も徹底保護・管理されていた。

庶民と相撲・武術

江戸時代の庶民にとって人気のスポーツといえば相撲であった。相撲は、農民が農作物の収穫を祈り、神の加護に感謝する祭りが起源とされているが、鎌倉時代以降、武士の間で心身の鍛錬や戦いに役立つものとして盛んに行われるようになった。大きな戦乱のない江戸時代になると、相撲は庶民の娯楽として見物するものとなり、相撲を職業とする力士集団も江戸・大坂・京都などに成立した。元々は寺社の建築、修繕などの募金を目的とした勧進相撲は、江戸時代に入ると勧進は名目だけになり、職業力士たちによって都市や繁栄地で盛んに興行されるようになった。富山でも、明和八年(一七七二)に江戸大相撲の鬼頭崎岩右衛門が力士八人を連れて勧進相撲を始めた。その後、富山に居住を許され、人足元締めとして藩に仕えたという。岩右衛門の指導で富山、魚津、氷見で越中相撲が開かれ、ここを登竜門とし、力士たちが次々と江戸の大相撲界に入った。一方で、野相撲や辻相撲といった庶民が行う相撲も盛んに行われたが、治安と風紀の維持のため辻相撲停止の命令が藩から出されたこ



町在にて心得違ひして武術稽古する者の縮方など申渡書
(菊池文書『旧記文久一』富山大学附属図書館蔵)

ともあった。また、村の祭礼の際の花相撲も藩への届け出が必要だった。大きな花相撲になると藩から役人が監督に来る場合もあった。しかし、江戸時代の「上市村家並絵図」(富山県立図書館蔵)には「角力場」が明記されており、庶民の娯楽としてなくてはならないものだったことが窺える。幕末になると、尊王攘夷や倒幕運動も起こり、襲撃事件が横行する中、武術が盛んになった。富山藩でも屋敷内などに剣術や柔術の稽古所を建てるための資金の貸与を願ひ出る者も現れた。本来は禁止されていたはずの庶民の武術教習が、十八世紀初期から確認され、幕末の流行期には、各地に武術の道場が出現し、時節柄に乗じて稽古に励む庶民へ心得違ひをしないように申し渡していた。

コラム 剣山と階ヶ嶽

江戸時代は、十八世紀末頃から江戸相撲が大変な盛り上がりを見せ、黄金時代を迎えた。江戸相撲で活躍した越中出身の力士と言え、まずは剣山谷右衛門である。享和三年(一八〇三)、婦負郡上掛尾村(現、富山市堀川町)に生まれ、二十山に見いだされ文政十年(一八二七)に鰐石文蔵のしこ名で初土俵、天保五年(一八三四)正月場所で初入幕、以後好成績を続け、同十三年二月に大関に昇進した。全盛期には二七連勝をあげ、不知火・秀ノ山と並んで「天保の三傑」と評された。同十四年正月に剣山谷右衛門と改名した。弘化四年頃に横綱推薦の話もあったが辞退した。嘉永五年(一八五二)に引退するが、十一年二十一場所、五十歳まで大関を務めたことは驚異である。

階ヶ嶽龍右衛門は、文化十四年(二八一七)に戸出村(現、高岡市戸出)の権平の長男として生まれた。天保十四年、二十五歳の時、地方巡業中の江戸相撲の力士鏡岩に見出され、江戸に出て雷権太夫の門弟となった。弘化五年(二八四八)初入幕をはたし、順調に出世して安政三年(一八五六)大関に昇進した。しかし、翌年、場所中の怪我がもとで出場できなくなり引退した。引退後は年寄を務めた後、故郷に帰り、権平の家を継いだ。その他に、水橋出身で西前頭三枚目まで進んだ黒崎佐吉などがある。



剣山谷右衛門
(国立国会図書館デジタルコレクション)

二 近代スポーツの始まり

武道の広がりとスポーツの始まり

藩政時代、藩主は一流の達人を招いて
武術を奨励した。しかし、廃藩置県や廢
刀令以後は衰退し、山口流の齋藤理則、
駒川改心流の前川重綱などによってその
劍脈が保たれていた。しかし、西南戦争



齋藤弥九郎
（『幕末偉人齋藤弥九郎伝』国会図書館デジタルコレクション）

や日清戦争により伝統的な武術と武士道が再び注目され、全国的にも大日本
武徳会の設立とともに、武術（武道）は再び盛んになった。富山でも明治
二十九年（一八九六）大日本武徳会富山支部が創設され、総曲輪に道場が建
設された。山口流、中条流の流れをくむ加藤弘之、中川政二郎、齋藤理則ら
が若者の指導にあたった。また、幕末江戸三大道場の一つ「練兵館」の創立
者である齋藤弥九郎は氷見仏生寺の出身で、十四歳で江戸に出てからは文武
に精進し、文政九年（一八二六）に江川太郎左衛門英龍の援助を受け練兵館
を開いた。長州藩の桂小五郎などが学んだという。

柔術は明治三十年頃までに富山市内の町道場とし
て多久間流の吉田道場、黒田道場、真楊流しんようの若林、
池淵、金尾などの道場があり、その師範は県下各地
に出張指導した。同十五年に嘉納治五郎によって創
設された講道館柔道は、同二十年に金尾柳神齊が富
山県初の入門者となり、後進の指導にあたった。同
四十年には吉野伴治が大日本武徳会富山支部の教授
として来県し、各学校の指導にあたってからは講道
館柔道が盛んになった。

水泳は、江戸時代においては水練として熱心に取
り組まれていた。明治十六年富山師範学校での夏季



大日本武徳会富山支部（『富山県写真帖』）

水泳訓練に伊勢の観海流から教師を招いて指導を受けた。同二十二年にも富
山中学校、のちに高岡中学校にも観海流から水泳教師が派遣されたため、本
県の水泳のほとんどが観海流だったが、明治の終わりには水府流が指導され、
大正期には能島流も普及した。

西洋由来のスポーツとしては、野球は、富山中学校の「文武会誌」による
と、明治二十九年に神通川原においてベースボール会が開催されている。当
時の用具はバットとボールだけで、各塁に赤旗を立てて選手はみな素手だっ
た。しかも十二人で守備を行っていた。野球らしい野球は同三十三年頃から
であり、富山商業学校や富山県師範学校、高岡中学校の野球もこのころ始まっ
たようである。同三十五年頃からグローブも全員が使用し、服装も脚絆、足
袋から刺子のズボン、ストッキングとなり、アンダーシャツを着るようになっ
た。漕艇は、同三十三年十一月に富山県師範学校が神通川において第一回の
短漕競技会を開催した。翌三十四年には高岡中学校においても短漕部が新設
され、毎年海軍記念日に伏木小矢部河口で短漕大会が開催された。同三十六
年に富山中学校、同三十九年には富山商船学校に短漕部が設立され、同年、
全国中等学校短漕大会で富山中学校が優勝した。

学校体育と運動会

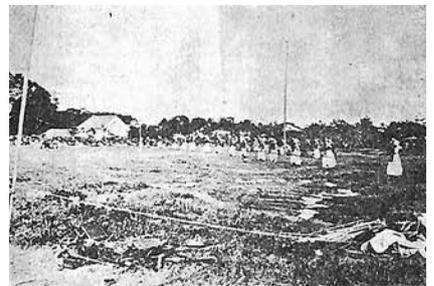
明治五年（一八七二）の学制では小学校の科目に「体術」が置かれ、武道
は退けられた。同六年の「学制二編追加」および「改正小学校教則」では体
術ではなく「体操」としてとりあげられた。本県でも体操を実施するようにな
ったが、一日十五分の指導時間を当て、それを五十分に分けて指導し、
内容も形式的な徒手体操の紹介が中心だった。同十二年には教育令が公布さ
れ、教育は地方の管理にゆだねられ、同十四年の石川県小学教則、諸科教授
要旨によると、画一的な徒手体操から遊戯や器械運動を導入し、児童の実態
に応じた指導を実施しようとしていたことがわかる。同十九年には学校令が
公布され、学校教育は国家目的に即するものでなければならぬとされ、戦

前の国家主義教育の方向が確定された。これによって、小学校の「体操」の教材の中に軽体操（普通体操）と「兵式体操」の並立した学校体育が形成された。同十八年には初の県立中学校（旧制）の富山中学校が開校したが、その教育課程にも体操があった。学校令により同十九年には富山県尋常中学校規則が定められ、体操の時数を規定して兵式体操が取り入れられた。同四十四年には中学校令施行規則が改正され、従来は課外活動であった撃劍（剣道）と柔道を体操科の正課として加えることが認められた。富山中学校では、これに先立つ同二十七年六月に体操科の一部として柔道と剣道が認められていた。



運動会の亜鈴体操（『置県百年 富山県』）

運動会は、明治二十年前後に実技の実習として公開されたことが始まりであり、儀式のあとの付帯行事として企画されることもあった。これらの公開演技は好評を博し、体操教科の啓蒙や洋服奨励を意図して運動会として単独で開催されるようになった。二十年代の運動会は、地区ごとに数校合同で開催され、体位の向上よりも気質の鍛錬を重んじた。当時各学校に広い運動場の設備はなく、会場には海浜や川原が利用された。演技内容も競争よりも行進法・徒手体操・亜鈴体操などの団体運動が主で、綱引き・旗取・城落としなどの競争遊戯が加えられるのは二十年代の後半だった。運動会に関する規程としては、同三十六年十月の「市町村立小学校運動会規程」があり、運動会は、春秋各二回以内、土曜日または休業日に開催することや小学校体操科の要旨に反しない運動を行うことなどが定められた。同三十年代後半になると、各学校単位でも大がかりな運動会が行われるようになった。内容も多彩になったため、「男子は剛健、女子は質実」を主旨とした内容にするなどの申し合わせが各地で行われた。「遠足運動」という行事も同二十年代から行われるようになった。



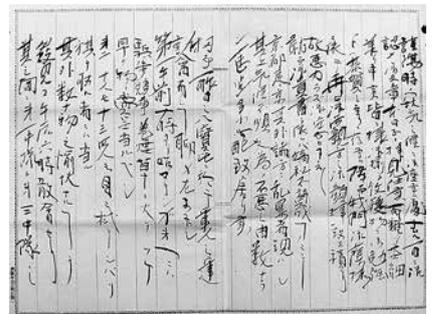
富山中学校運動会（『富山県教育史』上巻）

徒手体操のほか中隊教練の実演が行われ多くの観客が詰めかけた。また、他校の生徒も参加する競技や、それぞれの学校の特色を生かした競技もあり、富山中学や高岡中学では英語や数学に関する競技、富山商業学校や高岡商業学校では珠算競争や簿記競争も行われていた。

コラム ― 戦前の運動会種目あれこれ

運動会の競技種目といえば、徒競走にリレー、綱引きや玉入れ、障害物競走に応援合戦などが思い浮かぶが、競技種目は時代によって移り変わっていく。県内の各学校で行われていた競技種目のうち、興味深いものをいくつか紹介する。明治末の小学校の運動会種目には、「子守競争」、「洗濯競争」、「武装競争」などがあり、「柿拾い」、「汽缶破裂」、「壺屋送り」、「韓信」、「赤十字」など想像がつかない競技もあった。同じころの中学校では「鉄条網潜り」や「相撲」、「夜間運送」、「提灯競争」などがあった。大正時代になると、小学校、中学校ともに競技性の強い陸上競技系の種目が増えてくる。中学校では柔道、剣道、相撲や、野球、テニスといった球技も実施された。「棒倒し」や「騎馬戦」といった種目も見られるようになった。一方で遊戯系の競技も健在で、「猿回し競争」や「仮面競争」などの楽しそうな競技が行われていた学校もあった。昭和に入り、中学校では次第に戦時訓練的な競技が増えてくる。「模擬戦」はその最たるものである。また、「手榴弾投」、「担架競争」、「重量運搬」、「防空演習」、「特殊潜航艇」など戦時下ならではの種目が目白押しだった。

運動会は軍隊でも実施されていた。日本で最初に行われた運動会は、同七年に海軍兵学寮で行われた競闘遊戯会であるとされるだけあって、軍と運動会のつながりは深い。日露戦争に出征した県人が家族に送った書簡には、休戦命令後に駐屯地で運動会が開催されたことを伝えている。



一昨日の八宝屯における軍人の運動会の様子、毎日の食糧などにつき書簡(内田家文書 富山県公文書館寄託)

三 スポーツの大衆化と戦争

越中相撲の黄金時代

相撲は、明治維新とともに衰退の危機にあったが、日清・日露戦争の勝利以後、再び盛り上がりを見せるようになった。当時、東京と大阪に相撲協会があり、プロの力士が本場所を行っていたが、東京相撲が中央場所の地位を占めていた。明治末期から大正にかけて越中出身の力士が活躍した。

明治三十六年(一九〇三)に第二十代横綱となった梅ヶ谷藤太郎は、西水橋町(現、富山市)の出身で、体重一五七・五キログラムのあんこ型、左四つからの寄りや体形を活かしたやぐら投げが得意だった。ライバル常陸山と並んで梅・常陸時代といわれる黄金時代を築いた。同四十四年に第二十二代横綱となった太刀山峰右衛門は、西呉羽村吉作(現、富山市)の出身、ソツ

プ型で一八八センチメートルの長身から繰り出す突き押しは破壊力十分で「太刀山の一突き半」と恐れられた。横綱在位中八四勝三敗という驚異的な成績



横綱梅ヶ谷(『近代日本人の肖像』国立国会図書館デジタルコレクション)

を取め、常勝將軍といわれた。

この他、下条村(現、富山市)出身で同四十二年に関脇に進んだ相撲巧者玉椿憲太郎は、引退後に年寄白玉として相撲道場を



横綱太刀山(『近代日本人の肖像』国立国会図書館デジタルコレクション)

作り、アマチュア相撲の普及に尽力した。横道村(現、滑川市)出身で同四十一年に小結になった緑島友之助は、引退後は立浪親方として双葉山・羽黒山らの名力士を育てた。さらに、大正二年(一九一三)に関脇になった水見町(現、氷見市)出身の黒瀬川浪之助、高岡市出身の小結射水川健太郎、上市町出身の小結敷島(初代)捲之助、近代最強力士と評される横綱栃木山を破ったこともあった魚津市出身の前頭筆頭琴ヶ浦藤次郎、戸出町(現、高岡市)出身の寒玉子為次郎など、幕内力士が多数輩出された。

地方相撲も農村部を中心に盛り上がった。夏のシーズンになると、花相撲・奉納相撲が県下各地で開催された。このような相撲興行は、興行主が県に届を提出し、賦課金(営業税)を納めた。越中で名の知れた草相撲としては、東から魚津の神明社、滑川の櫛原宮、富山の牛ヶ首神社、小杉の大閤山相撲、新湊の放生津八幡宮、井波の高瀬神社、同瑞泉寺角力講などがあり、地域ごとの対抗試合も人気を集めた。地方相撲の盛り上がりとともに、力士を養成する部屋も登場し、頭取と呼ばれた力士出身者が弟子を取り、力士を養成し興行の運営にかかわった。新川郡には十三の部屋があったといわれる。県内



草相撲の番付(平井家文書 富山県公文書館蔵)

各地には活躍した力士や頭取の石碑が残されている。大正四年六月に総曲輪に富山国技館が竣工し、梅ヶ谷の引退興行や太刀山・黒瀬川一行の東京大相撲なども行われたが、同五年十一月火災により全焼した。

スポーツの普及と部活動

近代スポーツは、大正期に学校を中心に盛り上がった。学校では、第一次世界大戦以後に国民体育の向上という方向に向けて、画一的な体操から児童生徒の自発的な活動を中心にしたスポーツが奨励され、内容も豊富になった。生徒から一般大衆へ愛好の輪が広がり、やるだけでなく見て楽しむスポーツへと大衆化が進んだ。一方で、



新しい体操・バイカル・ダンス
（『置県百年 富山県』）

心身鍛錬が強調され、勝敗にこだわらなくなった面もあった。

武道は、明治当初は一時衰退したものの、庶民にも広がり、町道場は栄えた。これらの町道場は民間における社会体育の振興を果たしたといえる。剣道では中央へ進出して達人と称された人物も存在した。無双の名剣士とうたわれた中山博道は、少年時代を富山で過ごし山口一刀流を学んだ。中山と並び称

コラム——盤持ち 村のウエイトリフティング

盤持ちとは、江戸時代から大正時代にかけて各地の町や村で行われた若者たちの力くらべである。盤持ちで使用されるのは大きな石や米俵だった。盤持ち石は村の神社や辻、地藏様の前などに置いてあり、現在でも県内各地に残されている。重さは五斗（約七十五キログラム）、八斗（約百二十キログラム）、一石（約百五十キログラム）があった。このような力くらべが地方相撲で活躍する若者たちを育てたともいえる。盤持ちは地域の行事であったが、大正十五年（一九二六）には富山日報主催の第一回富山県盤持大会が開催された。現在も、南砺市の城端別院善徳寺で盤持ち大会が虫干し会の際に行われている。



パンモチ石（『八尾町史』）



県立高岡高等女学校のバレーボール
（大正14年）（『富山県教育史』下巻）

される渡辺邦治は富山市の生まれで、富山で剣を学びのちに武道専門学校の初代剣道主任教授となった。柔道や相撲では中学校の活躍が目立つ。富山中学校は大正十年（一九二一）、全国中等学校柔道争覇戦で全国制覇を成し遂げた。また、高岡中学校は同四年、第一回北陸関西中等学校柔道大会で優勝し、同十年第二回富山県学生相撲大会で団体優勝を果たした。

外来スポーツの流行は、学生から始まり、野球・テニス・ボート・陸上競技などが広まった。バスケットボールは明治三十九年（一九〇六）、県立富山高等女学校で教師指導の下始められた。大正十五年十月の神宮外苑での第二回明治神宮体育大会には、富山女子師範学校が出場した。バレーボールは、大正十三年、神戸高商の鳩沢豊三が富山女子師範の生徒に初めて指導したが、県立富山高女、市立富山高女、県立高岡高女にもバレーボール部が結成され、昭和に入ると、県内の各女学校から小学校にまで広がった。サッカーは、大正十二年五月に官立富山薬学専門学校に蹴球同好会が、同年六月に富山中学校、同十三年四月には富山師範と神通中学にそれぞれ蹴球部が創設された。テニスは、明治末には軟式が各中学校で行われていたが、同十二年には富山中学、富山商業、神通中学、砺波中学などにも準硬式の庭球部が作られた。社会人や女子にも愛好され、同十三年四月には富山薬専主催でデビスカップ出場選手の熊谷一弥などを招き公開競技が行われた。陸上競技は、明治二十三年に学校で遊戯の一つとして徒競走や障害物競走が取り入れられ、明治末には各学校での運動会や体操の授業で競走が行われ、大正期には跳躍や投擲競技も根付いた。明治四十五年十一月三日、第一回富山県学生大運動会が開かれ、小学校・中学校から富山薬専に至るまで参加し、競走や体操が競われた。大正十年頃になるとスパイクシュー



女性の団体初の立山登山(『置県百年 富山県』)

ズが用いられるようになり、青年体育大会などが活発に行われた。昭和に入り軍国主義の台頭とともに体育振興が図られ、陸上競技の定着は好記録を生み、マラソンも盛んになった。

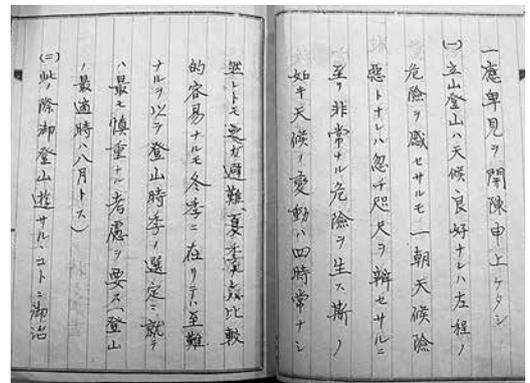
スキーも雪国のため実用もかねて活発だった。明治四十五年二月、新潟県上越市高田で行われたスキー講習会に、富山県警察教習所の教師高野貞一が参加して県下にスキーを伝習し、県内に広まった。大正七年一月に立野原スキークラブ、同年二月には富山スキークラブが創立された。以後、立野原や大山寺公園、粟巣野、宇奈月、呉羽山などで各種の競技会が行われるようになった。

信仰登山からスポーツ登山へ

日本の近代登山は、お雇い外国人ゴーランドなどが始まりとされ、スポーツとしての登山は、ウエストンの北アルプスの探検登山がそのスタートとされている。ウエストンは明治二十六年(一八九三)、信州から鉢ノ木峠を越えて立山へ登山しているが、十一年に小杉復堂が立山温泉から立山に登頂、同年、当時英国大使館書記だったアーネスト・サトウもA・G・S・ハウス

とともに鉢ノ木峠を越えて立山温泉に至った。剣岳登山が文献に現れるのは、同四十年七月、三角点測量のため参謀本部陸地測量官の柴崎芳太郎が、人夫三人を連れて登頂したのが最初である。その時、頂上で錫杖の頭と鎗の穂先を、頂上の岩窟で焚火の跡を発見した。その後、吉沢庄作、田部重治などの多くの登山家によって白馬岳や薬師岳などの登頂も行われた。

大正期になると、登山も大きく変化する。スポーツの考えを取り入れ、自然に親しみ、心身を鍛え、集団で楽しむ野外活動としても捉えられる



大正13年 秩父宮殿下立山御登山一件 (富山県公文書館蔵)

立山登山を決行した。

冬の立山へのスキー登山も活発になったが、同十二年一月、楨有恒、板倉勝宣、三田幸夫の三人が松尾峠で猛吹雪のため遭難し、板倉が凍死した。これは立山での初の冬山遭難であり、三人は当時第一線級の登山家だっただけに衝撃だった。同十三年五月には、秩父宮雍仁親王が、皇族として初めて積雪期の立山にスキー登山を果たした。前年に立山で遭難した板倉は、秩父宮にスキーをコーチした人物の一人だった。秩父宮は五月六日に富山駅に到着、南富山駅から千垣を経て藤橋で一泊、翌日から立山登山のため室堂で五泊の後、五月十二日に千垣から南富山、富山駅を経て東京に帰京した。県内の新聞各社は秩父宮の登山の様子を大々的に報じ、県内は大いに盛り上がった。大正十三年の立山登山者数は群を抜いて増加しており、皇族の登山がブームを呼んだ。

野球の流行

富山での野球は、明治中期以降、各中学校や専門学校に野球部が作られ、対抗試合が活発に行われ、大正期に興隆期を迎えた。全国中等学校野球優勝

ようになった。学校でも林間学校・臨海学校などの行事が多くなる中、明治四十五年七月に東水橋小学校の高等科一・二年生八十人と父兄十五人が五人の教諭の引率で立山に登山し、無事下山した。それ以後、県内の学校教育に立山登山が取り入れられた。女性の登山熱も高まり、大正八年(一九一九)七月、富山県女子師範学校、富山高等女学校の生徒四十八人が、女性団体として初めて

大会予選を兼ねた北信越中等学校野球大会に富山県勢が参加するのは大正五年（一九一六）の第二回大会からだった。この大会には富山中学と高岡中学のみが参加したが、会を追うごとに参加校が増え、富山師範、富山商業、魚津中学、神通中学などが参加した。北陸予選を勝ち抜き、県勢が初の甲子園出場を果たしたのは、昭和十四年



第1回富山県中等学校野球大会の記事
(富山日報 大正9年6月16日)
(富山県立図書館蔵)

(一九三九)の第二十五回大会に出場した高岡商業だった。県内の中等学校の野球大会としては、大正九年六月に富山日報主催で第一回富山県中等学校野球大会が開かれ、富山中学が優勝した。

社会人野球も大正の中頃から活発になり、大正七年にはエックス倶楽部対富山中学などの対抗試合が行われた。同九年には富山マーチャント・クラブが誕生し、その主催による同十一年の県実業団大会では富山商クラブが優勝した。少年野球が興ったのも、このころである。各町、各地域対抗野球も流行したが、野球好きの大人たちの指導によって少年チームが編成され、同十二年八月の大阪での全国少年野球大会には富山師範付属小学校チーム、富山市五番町小学校チームが出場した。



富山市での日米野球の記事
(富山日報 昭和9年11月14日)
(富山県立図書館蔵)

全国的に野球人気が高まる中、小学校から大学にいたるまでの学生野球に統一的なルールがなく、学生野球の商業化、興行化などの問題が指摘されていた。そのため、

昭和七年（一九三二）、文部大臣からいわゆる「野球統制令」が出され、小学校から大学・高等学校まで学生野球全体が統制を受けることになり、富山県でも知事から訓令が出された。そのような中、富山の野球ファンを湧かせたのは、日米親善職業野球大会である。同九年十一月十三日、富山市の神通川廃川地を整備して作られた神通球場でのこの大会は、二万人余りがスタンドを埋め尽くした。アメリカチームにはベーブ・ルース、日本チームには沢村栄治などがいた。試合はベーブ・ルースが本塁打を放つなど、十四対〇でアメリカの勝利に終わった。

また、大門町（現、射水市）出身の正力松太郎は、読売新聞社長として、同九年十二月に最初のプロ野球球団大日本東京野球倶楽部（現、読売ジャイアンツ）を創設し、戦後、同二十四年二月には初のプロ野球コミッショナーに就任した。

戦時下の体育・スポーツ

満州事変勃発後、戦線の拡大に伴い、これまでの教育体制は戦時体制に切り換わっていった。昭和十三年（一九三八）一月、厚生省が創設され、戦力強化の意味から体育の重要性を取り上げ、普及に乗り出した。文部省所管の体育運動行政は、学校体育を残して厚生省に移された。



ラジオ体操(『置県百年 富山県』)

文部省は小学校・中学校・師範学校の体操科教授要目を昭和十一年に改訂し、富山県はこれを受けて翌十二年「富山県学校体操標準教授細目」を制定し、人格陶冶の強調、日本固有教材の選択、性的特殊性の考慮、教材の系統化と身体発達の重視をねらった。戦時色が深まるとともにラジオ体操の普及が進められ、県の秘書課にはラジオ体操係が設置され、学校、職場、町内会等のさまざまな場面で行われるようになった。

た。同十四年には「小学校武道指導要目」が定められ、柔道・剣道が尋常小学校五学年以上及び高等小学校男子に対して時間外で指導されることになった。

同十四年四月、国は道府県や市に対して、十四

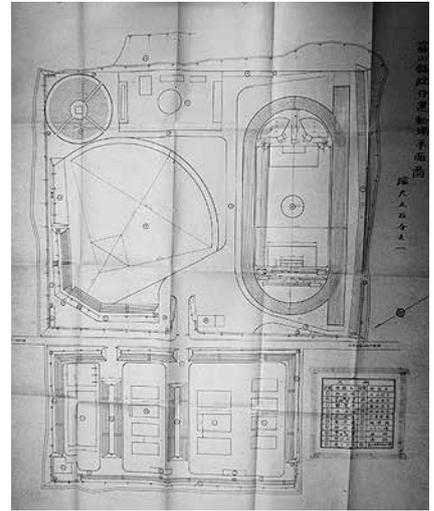
年度に全国主要都市で建設される運動場に対して建設費の一部を補助すると通達し、一般国民の利用に適する運動場の普及による国民の体位向上を図った。富山県でも紀元二千六百年記念事業として西呉羽地内（現在の富山市茶屋町）に県総合運動場の建設を計画した。同年六月の厚生省体力局長から県知事宛ての補助通知には、条件として特殊技術を要しない工事は「成るべく青少年等の勤勞奉仕を織込み実施すること」が記され、県内中学校、高校等の生徒らが夏季休暇の間に各校五日間ずつ勤勞奉仕を行った。この総合運動場は戦争の深刻化であまり使われず、練兵場となった。

同十五年には国民体力法が公布され、十七歳から十九歳の者は体力検査を実施することになった。翌年改正された体力章検定実施要綱によると、検定種目は走・跳・投・運搬・懸垂の五種で、検査結果で上・中・初級と級外に分け記録された。太平洋戦争開戦の同



県立高岡高等女学校での柔道
（『富山県教育史』下巻）

十六年には文部省の指示により県学務部に知事を団長とする富山県学校報国団が設置され、各学校の運動部もその傘下に位置付けられた。十七年に入ると文部省は戦時下学徒体育の重要性をさらに重視し、訓練上必要な種目の競技会を重点に



富山縣綜合運動場平面図
（富山県公文書館蔵）

年一回行い、主催は文部省またはその外郭団体に限ることを原則とした。参加範囲が県内のは学校長判断、数県に及ぶものは同一種目または中学校別に年一回とすることになった。野球などの球技は次第に疎外され、全国中等学校野球大会は同十六年大会から中止となり、他の球技も十八年以後はほとんど活動停止となった。

昭和十八年の中等諸学校規定、師範学校規定の公布により、体操科は体操科と改称され、基本科目として教錬・体操・武道に分けられた。教錬の目的は男女別に示され、軍事的基礎訓練と国防能力の増強及び皇軍養成等の趣旨が示された。武道では、男子に銃剣道、女子に薙刀が必修となり弓道も正課に加えられた。同十八年十一月の「教育二関スル戦時非常措置方策」により、学生・生徒の体育大会は一切廃止されることとなり、グラウンドも防空退避壕と野菜畑と化していった。同二十年五月には「戦時教育令」が公布され、学校の授業はほとんど停止され、中等学校以上の生徒の大部分は勤勞動員されることになった。

四 スポーツの復興

戦後スポーツ界の動向

戦時中、禁止または抑圧されていた様々なスポーツは、戦後、一斉に解禁された。特に野球は、スポーツ復興の牽引役といってもよい。昭和二十一年（一九四六）七月には戦後初の第二十八回全国中等学校優勝野球大会富山県大会が上市農林、富山中学、神通中学、富山商業の四校の参加で行われた。その後、各校に野球部が復活し、翌二十二年の第二十九回大会には十九チームが参加し、この大会を勝ち抜いた高岡商業は、北陸大会も勝ち抜いて甲子園に出場し、県勢として甲子園初勝利を飾った。社会人野球は、同二十一年二月にオール富山野球クラブが設立され、七月の全国都市対抗野球選手権大

会信越予選を勝ち抜き、全国大会へ出場した。学童野球大会は、同二十一年秋から高岡市や富山市で開催された。このような野球熱の盛り上がりの中で、同二十二年五月には「野球統制令の廃止」が訓令され、富山県では「学生野球の施行について」の通牒が通達された。

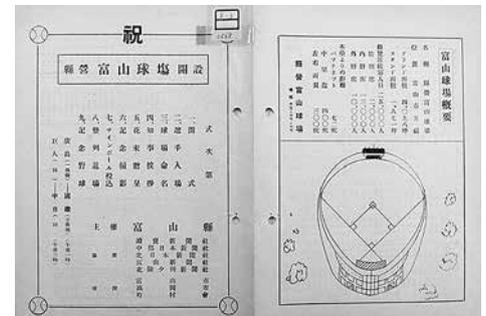
その他のスポーツについては、出征していた選手や関係者が復員し、スポーツ団体の組織作りが進んでいった。昭和二十一年、二十二年に結成された団体は、富山県バレーボール協会や同陸上競技協会など十七団体に上った。同二十二年六月には、戦前からあつた富山県体育協会が民主的に再編成された。県および県体育協会は、同二十三年に富山県民体育大会（県体）を計画し、第一回大会として九月に夏季大会、翌年一月にスキー大会を開催した。

学校体育では、昭和二十年十一月に文部省が「終戦に伴う体錬科教授要目取扱いに関する件」と「武道ノ取扱ニ関スル件」をそれぞれ出し、翌二十一年には「学校校友会運動部組織運営に関する件」の通牒を出した。これらによつて軍事的な体操・遊戯、武道の中止、食糧増産・戦災復興等の勤労作業と体育の授業との連携をとることが禁止され、戦時下の内容と真逆の方向が取られた。同二十二年七月には「学校体育指導要領」が發布されて「体錬科」は「体育科」と名称を変えた。武道がスポーツとして復活するのは同二十五年以降である。同二十三年三月二十日には、文部省より「学徒の対外試合について」の通牒が出され、小学校では校内競技に留め、学校教育の一環として競技をするように指示された。同二十四年には「小学校学習指導要領体育編」（試案）、同二十六年には「中学校・高等学校学習指導要領保健体育科編」（試案）が発行され、民主的な体育教育が進められた。

スポーツ熱が高まり、各種スポーツは復活してきたが、全国レベルの大会では富山県の水準はきわめて低かった。直接的な原因は、体育施設の不備と専任指導者がいないことであつた。県教育委員会は指導者の養成に取り組み、昭和二十五年に二百五人の町村体育指導員を委嘱し、中央の体育指導講習会に派遣した。体育施設の面では、各郡市に一ヶ所ずつ夜間照明施設を設置し



県営富山陸上競技場整地工事現場写真
(富山県公文書館蔵)



県営富山球場開設記念パンフレット
(富山県公文書館蔵)

て社会人の体育活動を促進した。これは、後年の学校体育施設開放事業の源流ともなった。また、一流のスポーツマンを招いての講習会も開かれた。

戦前にあつた体育運動施設は戦争によつて荒廃していた。県は戦前にあつた競技施設の復元を第一としたが、呉羽の富山県総合運動場は陸軍の演習場となつたあと、戦後地元に戻還されてしまい、神通グラウンドを総合運動場に整備する

計画も、隣接する学校の敷地問題のため立ち消えとなつた。続いて、富山市五福の旧富山練兵場跡地を国から買収して総合運動場を建設する計画が立てられた。ここでも富山大学の創設にともない用地取得は難航し、予定敷地内の東側一部を買収したにとどまり、そこに野球場が建設された。こうして県営富山球場は戦後初の県立体育施設として昭和二十五年七月に竣工した。観客収容数二万五千人の本格的球場だつた。完成を記念して同年七月二十三日、広島カープ、国鉄スワローズ、読売ジャイアンツ、中日ドラゴンズを招いて公式戦が開催された。

スポーツが盛んになる中、体育施設の設置を要望する声が高まり、公共の体育施設が続々と建設されていった。契機となつたのは県民体育大会の会場確保と第十三回国民体育大会の開催決定だつた。富山市五福の県営球場に隣接する土地に県営富山陸上競技場の建設が進められ、同二十九年五月にはスタンド工事などを残して完成し、第七回県体で使用された。その後、同三十二年七月にはメイン

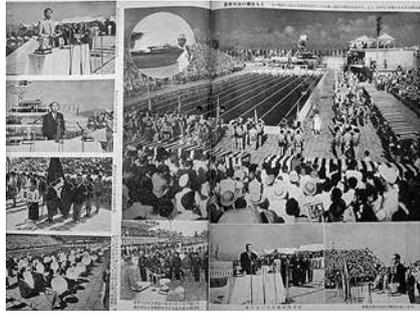


富山市体育館（『富山市史』第三巻）

スタンドと本館が完成し、第一種公認競技場として使用できるようになった。この他、二十九年四月に県営富山庭球場が富山市西中野に、三十二年十月には公認五十メートルプールとして県営プールが高岡高校敷地内に完成した。県下の市や町でも体育施設の新設や整備が進み、二十五年に氷見市立朝日山相撲場、二十六年に高岡市立前田コート、三十二年に富山市体育館、三十五年が高岡市立体育館が建設された。

第十三回国民体育大会とおおやま国体

富山県で国体を開催しようという機運が台頭したのは、昭和二十五年の県営富山球場建設の頃からである。その後、同二十八年三月に県議会は、県体育協会加盟団体長の連署で提出された「第十回国民体育大会」の招致に関する請願書を受けて、「第十回以降の国体開催要望」を決議した。同年四月には県体育協会会長から正式に「第十回国民体育大会開催申請書」が日本体育協会に提出された。第十回国体の開催を希望する県は富山県を含め四県あったが、日本体育協会国体委員会は、第十回国体の富山県開催を内定した。た



富山国体グラフ(富山県公文書館蔵)

だし、同三十一年までに体育施設の整備や各種競技団体の育成強化などを確立するという条件付きだった。第十回国体の夏季大会（水泳競技）は福岡県との招致争いとなり、水泳プールがないことと九月開催での水温の低さがネックだったが、関係者の努力と県営高岡プール着工のめどが立ったこともあり、同三十二年九月に富山県開催が決定した。一方、選手強化策や各競技を

開催する市町村の決定など多くの問題を解決しなければならなかった。

昭和三十三年九月十四日、夏季大会水泳競技会は、県営高岡プールで高松宮殿下の臨席を得て開催された。秋季大会は十月十九日、県営富山陸上競技場に、天皇・皇后両陛下をお迎えし、一万二五五九人の選手が参加して開催された。日本のブラジル移住五十年を記念してブラジル邦人が特別参加した。この大会は、体育施設や選手・役員を受け入れ態勢などの点で高い評価を得た。宿舍の不足については民家に宿泊させる方式を採用し、行き届いた心遣いでもてなしたことが好評を博した。本県選手団の活躍もめざましく、入賞者数は過去最高となり、天皇杯十位、皇后杯十七位の成績を収めた。

この大会によって、県内に普及していなかったスポーツが根を下ろし、県民のスポーツへの理解と関心が深まった。また、昭和三十三年の東京オリンピックのテレビ中継は、人々のスポーツへの関心を高め、高度経済成長による所得と余暇も相まって、野球、サッカー、水泳、バレーボール、テニス、スキー、ボウリング、ゴルフ、キャンプなどの様々なスポーツへの県民の参加を生んだ。このような動きに対して体育施設の充実が図られるとともに、生活環境の向上に伴う運動不足や栄養の過剰摂取への対応として、より一層の健康と体力づくりの推進が課題となった。昭和四十九年二月の県議会で、当時の中田知事は「県民ひとり一スポーツ」を提唱し、スポーツ指導者の確保と養成、社会体育施設の整備などのスポーツ振興を掲げた。

このような中、昭和五十一年二月に第三十一回国民体育大会冬季スキー競技会が北陸で初めて開催された。同四十六年秋に全日本スキー連盟に誘致を申し入れ、同四十八年一月に大会開催が決定した。以降、本格的な準備が始まり、ジャンプ台の設計・建設、リレースタートゾーンの整備、競技本部として利用する山野スポーツセンターの建設などが進められた。大会の愛称は「おおやま国体」に決定し、昭和五十一年二月十四日、皇太子殿下、同妃殿下をお迎えして開会式が行われた。総勢一九二六人の役員、選手が参加し、観衆はおよそ八千人に上った。競技は十五日から十七日にかけて行われ、高

温、濃霧、雨の悪コンディションに見舞われたが、雪をコースに運び入れるなどの整備を行い、予定通り競技が行われた。県勢は総合九位に食い込んだ。山野スポーツセンターは、現在も立山山麓におけるレクリエーション活動やスポーツの合宿に利用され、県民の健康づくりに寄与している。

五 近年のスポーツ

県は、昭和五十八年（一九八三）、置県百年を機に新たな指針として同六十五年度（一九九〇）を目標年度とする「富山県民総合計画」を策定した。その挑戦課題の一つに「日本一の健康・スポーツ県」が掲げられ、これまでの「県民ひとり一スポーツの推進」から「生涯スポーツ活動の推進」へと発展させることになった。この「生涯スポーツプラン」の主な施策として、地域や職場のスポーツ活動の促進や、体力づくりノート「チャレンジ三〇一五」を活用した児童・生徒のスポーツ活動の活性化、二〇〇〇年国体、同六十九年（一九九四）全国高等学校総合体育大会（全国高校総体）等の誘致・開催にともなう競技力の向上があった。同五十九年には、競技力向上の中核拠点として富山県総合体育センターが竣工した。

昭和六十年には県体育協会や県議会、県教育委員会が二〇〇〇年国体誘致について決議し、翌六十二年には、県体協会長、知事、県教委の連名で文部省及び日本体育協会に夏季・秋季大会の開催要望書を提出した。県スキー連



2000年とやま国体ポスター
(富山県公文書館蔵)



第36回全国身体障害者スポーツ大会「きらりんピック富山」ポスター(富山県公文書館蔵)

盟会長も同六十年、全日本スキー連盟へスキー競技会の開催について申請書を提出した。同六十三年三月、日本体育協会において第五十五回国民体育大会開催申請書の提出順序が承認され、スキー競技会も同六十一年四月の全日本スキー連盟の理事会において開催が承認され、二〇〇〇年国体の夏季・秋季及び冬季のスキー競技会の富山県開催が事実上内定した。平成六年度（一九九四）の全国高校総体も、平成三年に富山県開催が決定しており、両大会にむけて準備と強化が加速した。県内では、特に全国高校総体や二〇〇〇年国体に向け、新しい施設の建設や既存施設の改修が進んだ。

平成六年度全国高校総体では、選手だけでなく全ての高校生が何らかの形で参加できるように「一人一役運動」が展開され、総合開会式の公開演技や装飾用の草花づくりなどの活動が進められた。

二〇〇〇年国体は、冬季大会が平成十二年二月十九日から二十二日、夏季大会は九月九日から十二日、秋季大会は十月十四日から十九日に開催された。秋季大会では、天皇皇后両陛下をお迎えして開会式が実施され、約二万人の選手・監督・役員と、式典演技出演者や観客などをあわせて五万人を超える

コラムー オリンピックと富山県出身者

本県出身のオリンピック出場選手をたどると、初めてオリンピックに出場したのは、冬の大会ではレックアラシッド大会（一九三二年）のフィギュアスケートに出場した老松一吉選手、夏の大会では、ベルリン大会（一九三六年）の馬術に出場した稲波弘次選手である。戦前はこの二名だったが、戦後になると増え、特に一九六四年の東京大会は九名の選手が出場した。メダリストは四名で、ローマ大会（一九六〇年）の体操団体で金メダルを獲得した三栗崇選手は県出身者最初のメダリストであり、東京大会でも体操団体で金メダルを獲得した。東京大会では、レスリングの堀内岩雄選手がライト級で銅メダルを獲得した。個人での最初の金メダルは、二〇一六年のリオ大会の田知本遥選手（柔道女子）、登坂絵莉選手（レスリング女子）である。最多出場は陸上競技競歩の谷井孝行選手である。来年の東京大会では何人の県出身選手が出場し活躍するか期待したい。

人々が参加した。十五日からは、三十一競技で熱戦が展開され、本県選手団も二百三の入賞、十四の競技で総合優勝を果たすなど多くの好成績を収め、男女総合成績・女子総合成績とも一位に輝いた。県民も、準備段階から地域ぐるみで国体に参加し、民泊やクリーンアップ運動など様々なボランティア活動などで大会の運営を支えた。十月二十八日と二十九日の両日には、富山市を会場に第三十六回全国身体障害者スポーツ大会「きらりんびつく富山」が開催された。「きらりんメイト」や「きらりんハーティ」など約五千四百人のボランティアが大会を支えた。

二〇〇〇年代以降も、平成二十二年に「全国スポーツ・レクリエーション祭」が開催され、同二十六年には富山第一高校が全国高等学校サッカー選手権で県勢初優勝を飾った。同二十七年からは富山マラソンが開催され、多くの参加者を集めている。同二十八年のリオデジャネイロオリンピックでは、柔道の田知本遙、レスリングの登坂絵莉が県出身者で初めて個人競技の金メダルを獲得し、同パラリンピックではボッチャ団体で藤井友里子が銀メダルを獲得した。令和元年（二〇一九）には大相撲の朝乃山が初優勝を飾り、翌年、県出身者では横綱太刀山以来となる大関に昇進した。

おわりに

郷土富山におけるスポーツの移り変わりを、江戸時代の武術・武芸から、近年のスポーツに関する出来事まで振り返った。

江戸時代に武士の間で取り組まれた武術や武芸は、武士の心身を鍛錬するためのものだったが、明治時代になると、西洋から様々なスポーツが紹介され、学校や軍での教育などに取り入れられていった。そのため、スポーツが本来持つ「遊び」「楽しみ」の要素は切り捨てられたともいえる。大正時代に入ると、大正デモクラシーの風潮の中で、それぞれが「楽しむ」要素も入り、

スポーツの大衆化が進んだ。戦争の時代へと進む中、スポーツは戦力強化の手段として統制が進み、実施そのものが困難になった。しかし、終戦後の復興の中で、スポーツは国民に希望と活力、潤いを与え、スポーツを楽しめる日常が戻ってきた。本県では、昭和三十三年（一九五八）の第十三回国民体育大会が盛大に開催された。この大会をきっかけに、スポーツ施設の整備と指導者の養成、県民のスポーツへの理解と関心が進み、様々なスポーツへの参加が見られるようになった。この流れの中、県は県民の健康と体力づくりの推進、競技力の向上のため、「県民ひとり一スポーツ」や「生涯スポーツ活動の推進」などの施策を実施し、あらゆる世代が日常的にスポーツに参加できるようにになった。

本年は新型コロナウイルスの感染拡大のため、以前のようないスポーツを楽しめない事態となっている。新型コロナウイルスとの戦いに終止符が打たれ、穏やかな日常の中でスポーツが楽しめる日が再び来ることを願って止まない。

主要参考文献

書名	編著者	出版年	発行・出版
1 『富山県史』通史編V近代上	富山県	1981	富山県
2 『富山県史』通史編VI近代下	富山県	1984	富山県
3 『富山県史』通史編VII現代	富山県	1983	富山県
4 『富山県史』民俗編	富山県	1973	富山県
5 『富山県教育史』上巻・下巻	富山県教育史編さん委員会	1971・1972	富山県教育委員会
6 『富山県体育協会史五十年史』	財団法人富山県体育協会	1978	財団法人富山県体育協会
7 『富山県体育協会史 昭和53年～昭和62年』	財団法人富山県体育協会	1988	財団法人富山県体育協会
8 『富山県スポーツ年史』	富山県総合体育センター	2004	富山県総合体育センター
9 『宮様、山へ大正期登山ブームのなかの皇族登山一』	富山県[立山博物館]	2017	富山県[立山博物館]
10 『富山市史』第1巻・第3巻	富山市	1960	富山市
11 『立山町史』下巻	立山町	1984	立山町
12 『黒部市史』歴史民俗編	黒部市	1992	黒部市
13 『第三十回郷土先人展 砺波野の草相撲の力士たち』	砺波市立砺波郷土資料館	2007	砺波市立砺波郷土資料館
14 『戸出町史』	高岡市戸出町史編纂委員会	1972	高岡市戸出町史刊行委員会
15 『富中富高百年史』	富中富高百年史編纂準備室	1986	富山高等学校創校百周年記念事業後援会
16 『高岡中学・高岡高校百年史』	高岡高等学校百年史編集委員会	1999	富山県立高岡高等学校創立百周年記念事業後援会
17 『富山大学教育学部附属小学校百年史』	百年史編集委員会	1977	富山大学教育学部附属小学校創校百周年記念事業実行委員会
18 『日本大百科全書』	小学館	1984～1994	小学館
19 『県広報とやま』No.163, No.300, No.373, No.378, No.379	富山県	1982-1994-2000	富山県
20 『武道の歴史とその精神 概説』（『武道論集』1）	魚住孝至	2008	国際武道大学武道・スポーツ科学研究所
21 『富山藩における武術教育に関する一考察』（武道学研究29）	石黒光祐	1997	日本武道学会
22 『富山藩における武術教育―四心多久間見流部について―』（武道学研究30）	石黒光祐	1998	日本武道学会
23 平成20年度特別企画展「越中の鷹狩り―近世を中心に―」	富山県公文書館	2008	富山県公文書館

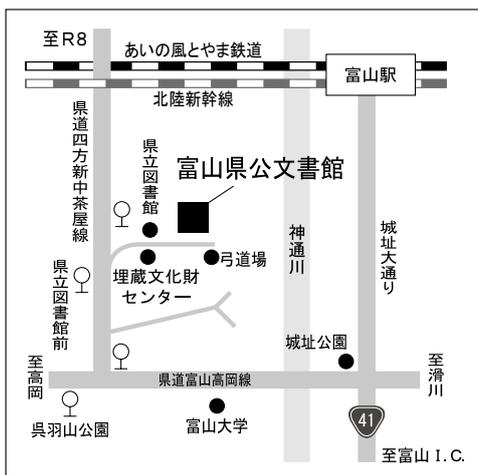
「とやまスポーツ物語」主要事項年表

年号	西暦	内 容
宝暦6年	1756	宝蔵院流槍術の達人、篠田信時が富山藩の槍術指南役に任じられる。
明和8年	1771	江戸大相撲の鬼頭崎右衛門が力士8人を連れて、富山で勸進相撲を始める。
安永2年	1773	富山藩藩校広徳館が開設され、弓術・居合・剣術・柔術・砲術・槍術が習練されるようになる。
寛政8年	1796	富山藩が、有沢河原で藩士の子弟に涵泳流の水練を実施する。
文政2年	1819	富山藩が、足軽に対して柔術・棒術などの稽古に励むよう訓示する。
天保3年	1832	吉田有恒が起倒流柔術を指南するようになる。
天保12年	1841	吉田有恒が天真白井流剣術師範となる。
天保13年	1842	劔山谷右衛門が江戸相撲で大関となる。
安政3年	1856	階ヶ嶽龍右衛門が江戸相撲で大関となる。
明治4年	1871	幕末剣士斎藤弥九郎（氷見仏生寺出身）が没す。
明治6年	1873	小学校において「体操」が実施されるようになる。
明治11年	1878	小杉復堂、佐伯雪村、林士幹、和田芳高の4人が立山へ初登山する。
明治20年	1887	金尾柳神（栄造）が富山県から初めて講道館に入門。
明治25年	1892	撃剣が流行し、山口流の斎藤理則などが道場を設け、多くの子弟を育成する。
明治26年	1893	登山家であり牧師であるW・ウェストンが立山に登る。
明治27年	1894	富山中学で、講道館柔道初段の大島英助が指導する。
明治29年	1896	富山中学の生徒が神通河原でベースボール（野球）を行う。大日本武徳会富山支部創立。
明治36年	1903	梅ヶ谷藤太郎（水橋町出身）が20代横綱に昇進。
明治37年	1904	北陸中学校端艇競走（ボート）で富山中学優勝。
明治39年	1906	富山高等女学校で教員指導のもとに卓球、バスケットボール、軟式庭球を行う。
明治40年	1907	緑島友之助（滑川市出身）小結に昇進。宇治長次郎らが案内人となり、柴崎芳太郎が劔岳に初登頂する。
明治42年	1909	玉椿憲太郎（水橋町出身）関脇に昇進。
明治44年	1911	太刀山峰右衛門（富山市呉羽出身）22代横綱に昇進。
明治45年	1912	高野貞一（富山県警察教習所教官）が、新潟県高田市で行われたスキー講習会に参加。
大正元年	1912	第1回富山県学生大運動会開催。
大正4年	1915	富山国技館が富山市総曲輪に竣工。第1回北陸関西中等学校柔道大会で、高岡中学優勝。
大正8年	1919	富山女子師範、富山高等女学校の生徒48人が、女性団体として初めて立山登山。
大正9年	1920	第1回富山県中等学校野球大会で、富山中学優勝。
大正10年	1921	全国中等学校柔道大会で、富山中学優勝。
大正12年	1923	松尾峠で榎有恒一行が猛吹雪で遭難し、1名の犠牲者をだす。第1回富山県中等学校陸上競技大会開催。
大正13年	1924	秩父宮雍仁親王、皇族として初めて立山スキー登山。
大正15年	1926	第1回富山県盤持大会開催。
昭和7年	1932	レークプラシッドオリンピックで老松一吉がフィギュアスケートに出場。野球統制令。
昭和9年	1934	日米職業野球富山大会が神通球場で開催。
昭和10年	1935	富山武徳殿が富山県庁北側（現、県庁前公園地）に竣工。
昭和11年	1936	ベルリンオリンピックで稲波弘次が馬術団体で6位。ガルミッシュ・パルテンキルヘンオリンピックで、老松一吉がフィギュアスケートに出場。第1回富山県体操祭が開催。
昭和14年	1939	富山県総合運動場が竣工。
昭和23年	1948	第1回富山県民体育大会開催。
昭和25年	1950	県営富山球場竣工。
昭和29年	1954	県営富山庭球場竣工。
昭和32年	1957	県営陸上競技場竣工。
昭和33年	1958	県営高岡水泳場竣工。第13回国民体育大会夏季大会、秋季大会開催。富山市体育館竣工。
昭和35年	1960	ローマオリンピックで三栗崇が体操男子団体で優勝。高岡市体育館竣工。
昭和39年	1964	東京オリンピック開催。三栗崇が体操男子団体に金メダル、堀内岩雄がレスリングライト級に銅メダルを獲得。
昭和50年	1975	山野スポーツセンターが栗巣野台地に開館。
昭和51年	1976	第31回国民体育大会冬季大会開催（大山町）。最悪の気象条件を克服し大成功のうちに終了する。
昭和58年	1983	「県民総合計画」が策定され、21世紀への3つの挑戦に「日本一の健康・スポーツ県づくり」が掲げられる。
昭和59年	1984	富山県総合体育センター開館。
平成6年	1994	平成6年度全国高校総体夏季大会が県下27市町村で開催される。
平成12年	2000	第55回国民体育大会（2000年とやま国体）開催。第36回全国身体障害者スポーツ大会（きらりんびっく富山）開催。
平成22年	2010	「全国スポーツ・レクリエーション祭」が開催。
平成26年	2014	富山第一高校が全国高等学校サッカー選手権で県勢初優勝。
平成27年	2015	この年から富山マラソンが開催。
平成28年	2016	リオデジャネイロオリンピックで、柔道の田知本通、レスリングの登坂絵莉が金メダル、同パラリンピックでボッチャ団体の藤井友里子が銀メダルを獲得。
令和元年	2019	大相撲の朝乃山が幕内初優勝し、翌年大関に昇進。

（『富山県史』、『富山市史』、『富山県スポーツ年史』、『とやまの歴史』改訂版より作成）

企画展史資料一覧

	史資料名	所蔵	実物	パンフ	パネル	ポスター	ちらし	
はじめに	富山市体育館写真(『富山市史』第三卷)				○			
	民弥流目録	富山県公文書館(浅野家文書)	○	○			○	
	吉田流弓伝受書	富山県公文書館(藤田家文書)	○	○		○	○	
	武技略伝	富山県立図書館	○					
	起倒流柔術地人之巻辨	富山県立図書館	○					
	白井流天真兵法真剣拵刀相伝書	富山県公文書館寄託(森田家文書)			○			
	宝蔵院流十文字鎌槍	富山市郷土博物館			○			
	天神真楊流柔術(『天神真楊流柔術極意教授図解』)	国立国会図書館デジタルコレクション			○			
	砲術免許状	富山県公文書館寄託(森田家文書)	○					
	大坪流十一か条相伝目録	富山県公文書館(浅野家文書)	○	○				
	諸芸雑誌巻十三	富山県立図書館	○					
	吉田家相伝青貝の弓	富山市郷土博物館			○			
	高島流大砲免許状	富山県公文書館(半田家文書)			○			
	馬乗式事録	富山県立図書館			○			
	向井流泳法(『遊泳人必用向井流秘伝遊泳術伝習法』)	国立国会図書館デジタルコレクション			○			
	御鷹野御屋献立	富山県公文書館(高堂家文書)	○	○				
	武芸格別出精につき奉書	富山県公文書館(半田家文書)	○	○				
	町在にて心得違いて武術稽古する者の縮方など申渡書	富山大学附属中央図書館	○	○				
	富山御領図	富山県立図書館			○			
	上市村家並絵図	富山県立図書館			○			
	剣山谷右衛門錦絵	国立国会図書館デジタルコレクション		○	○			
近代スポーツの始まり	大日本武徳会地方委員任命書	富山県公文書館(小山家文書)	○					
	富山県小学中等体操科教授免許状	富山県公文書館寄託(大田家文書)	○					
	市町村立小学校運動会規程(県報)	富山県公文書館	○					
	一昨日の八宝屯における軍人の運動会の様子、毎日の食糧などにつき書簡	富山県公文書館寄託(内田家文書)	○	○				
	斎藤弥九郎像(『幕末偉人斎藤弥九郎伝』)	国立国会図書館デジタルコレクション		○	○			
	大日本武徳会富山支部と演武場(『富山県写真帖』)				○			
	富山中学校(『富山県写真帖』)				○			
	高岡中学校(『富山県写真帖』)				○			
	新川県小学校教則	国立公文書館			○			
	運動会の垂鈴体操(『置県百年』)			○	○			
	小学校の体操の授業風景(『富山県教育史』上巻)				○			
	富山中学校運動会(明治33年)(『富山県教育史』上巻)			○	○			
	スポーツの大衆化と戦争	太刀山の手紙	富山県公文書館(佐藤家文書)	○				
		草相撲の番付	富山県公文書館(平井家文書)	○	○			○
横綱梅ヶ谷(『近代日本人の肖像』)		国立国会図書館デジタルコレクション		○	○	○	○	
横綱太刀山(『近代日本人の肖像』)		国立国会図書館デジタルコレクション		○	○	○	○	
玉椿(『加越能力士大鑑』)		国立国会図書館デジタルコレクション		○	○			
緑島(『加越能力士大鑑』)		国立国会図書館デジタルコレクション		○	○			
バンモチ石(『八尾町史』)				○	○			
若の森の石碑(『山田村史』)					○			
富山国技館落成(『置県百年』)					○			
新しい体操・バイカル・ダンス(『置県百年』)				○	○			
全国中等学校柔道大会優勝時の写真		富山県公文書館(黒田家文書)			○			
県立高岡高等女学校のバレーボール(大正14年)(『富山県教育史』下巻)					○	○		
城端のイカダスキー(『置県百年』)					○			
大正13年秩父宮殿下立山御登山一件		富山県公文書館	○	○				
女性の団体初の立山登山(『置県百年』)				○	○			
越中国立山温泉并新道之図		富山県立図書館			○			
第1回富山県中等学校野球大会の新聞記事(『富山日報』大正9年6月16日)(複製)		富山県立図書館	○	○				
野球の統制についての訓示(県報)		富山県公文書館	○					
富山市での日米野球の記事(『富山日報』昭和9年11月14日)(複製)		富山県立図書館	○	○				
昭和初期の富山市内の風景(『富山市史』第二巻)					○			
ベープ・ルース富山来県(『置県百年』)					○			
ラジオ体操(『置県百年』)			○	○				
県立高岡高等女学校での薙刀(『富山県教育史』下巻)			○	○				
校庭の開墾(『置県百年』)				○				
富山縣総合運動場平面図	富山県公文書館		○	○				
スポーツの復興	県営富山球場開設記念パンフレット	富山県公文書館	○	○				
	県営富山陸上競技場整地工事現場写真	富山県公文書館	○	○				
	富山市体育館写真(『富山市史』第三巻)			○				
	第1回富山市学童野球大会(『富山市史』第三巻)				○			
	神通球場(『富山市史』第三巻)				○			
	富山庭球場写真	富山県公文書館			○			
	建設中の高岡市立体育館(『富山県史』通史編VII現代)				○			
	『富山国体グラフ』	富山県公文書館	○	○				
	『心から選手を迎えましょう—国体宿舎の方へ—』	個人蔵	○					
	県営山野スポーツセンターパンフレット	富山県公文書館	○					
	富山国体開会式(『置県百年』)			○	○	○	○	
近年のスポーツ	第13回国民体育大会会場案内図(『富山国体ガイド秋季大会』)				○			
	おおよま国体(『置県百年』)				○			
	「一人一役」実践活動報告書	富山県立図書館	○					
	あいの風夢のせて 第55回国民体育大会 2000年とやま国体 総合優勝記念誌	富山県立図書館	○					
	朝乃山凱旋パレードチラシ(複製)	富山県公文書館	○					
平成6年度全国高等学校総合体育大会関連ポスター	富山県公文書館			○				
第36回全国身体障害者スポーツ大会「きらりんピック富山」ポスター	富山県公文書館		○	○				
2000年とやま国体ポスター	富山県公文書館		○	○				



■ 交通機関

- JR富山駅発バス ● 新港東口行〈県立図書館前〉下車徒歩……………3分
 ● 高岡小杉方面行〈呉羽山公園〉下車徒歩……………10分